

# かに

KANI



財団法人 がん研究振興財団

第38号 2011

## 表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語のCancerは、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかさされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鋏やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部の苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる；国立がんセンター第3代総長)

巻頭言

財団の新たな方向 ..... 会長 河野 俊二 ..... 2

トピックス

1. 「がんを防ぐための12か条」が新しくなりました！ ..... 3  
 2. 東日本大震災で被災されたがん研究者に研究助成 ..... 7

座談会

～がん研究への挑戦・財団への期待～

中村 祐輔／野田 哲生／中釜 斉／高山 昭三 ..... 8

海外のがん研究・医療機関から

東アジア諸国とのがん対策の質向上を目指した協同研究の進捗と展望

..... 田中 英夫 ..... 18

研究所と病院間の共同研究を推進するために

..... 山田 康秀 ..... 22

研究助成・研究報告

「余命1ヶ月の花嫁記念課題」研究に寄せて ..... 清水 千佳子 ..... 27

市民公開講演会

がん撲滅に向けた新たな挑戦 ～がん研究の明日を担う方々へ～

..... 中釜 斉 ..... 29

講演1 遺伝子の個人差とがんへの罹りやすさ ..... 河野 隆志 ..... 31

講演2 ヒトパピローマウイルス感染と子宮頸がん ..... 齋藤 真子 ..... 33

講演3 ドラッグデリバリーシステム ..... 松村 保広 ..... 34

講演4 がんの個性に合わせた治療法 ..... 柴田 龍弘 ..... 36

国際がん看護セミナーに集う

第11回国際がん看護セミナーを開催して ..... 丸口 ミサエ ..... 38

財団の事業概要

「第3次対がん10か年総合戦略」支援事業 ..... 41

看護師等コ・メディカルの人材育成事業 ..... 47

第43回がん研究助成金の贈呈 ..... 48

ご寄付芳名録

..... 52

財団法人がん研究振興財団 役員・評議員名簿

..... 56

あとがき

..... 58

# 巻頭言

## 財団の新たな方向



会長  
河野 俊二

この度の東日本大震災により、亡くなられた方々に謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

当財団といたしましても被災されたがん研究者の皆様が、一日も早く通常通りの研究環境が整いますようご支援申し上げたいと考えております。

さて、平素は当財団の運営につきまして、ご理解ご協力を賜っておりますことこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。

ご案内のとおり、当財団を取り巻く環境は大きく変化しております。

こうした中、昨年6月の定例理事・評議員会以来、今後の財団のあり方について二回の懇談会をもちまして皆様から貴重なご意見を頂いたところでございます。

官民上げての「がん研究の推進」はこれまで多くの成果を上げて参りましたが、2人に1人ががんに罹り、3人に1人ががんで亡くなることを考えますと、国民のがん研究への期待は大変大きいものがございます。

私共といたしましては、これら国民の期待に応えるためにも公益法人化を目指し、新しい組織で、がん撲滅に向けて、その一翼を担いたいと考えております。

幸い、ご提案申し上げた方向で、この3月期の定例理事・評議員会にてご決議いただきましたので、今後はそれに向けての準備に邁進する覚悟でございます。

未だに続く余震が、多くの被災者の不安を駆り立てる中、科学の進歩と日本人の叡智を結集し、被災地の一日も早い復旧と被災者の皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(このの しゅんじ)

